

# Arthuriana Japonica: Newsletter No. 35

November 2022

## 国際アーサー王学会日本支部会報 Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

### 目次

I. 2021年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	1
研究発表要旨	3
シンポジウム要旨	3
II. 電子化について	6
III. 学会メーリングリストについて	7
IV. 会計からのお願い	7
V. 学会サイトについて	7
VI. 第36回年次大会について	7
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	7
VIII. 会員名簿に関するお願い	8
IX. 文献情報	8
英文学	8
独文学	9
北欧文学	10
仏文学	10
中世ラテン・イタリア文学・その他	12

### I. 2021年度年次大会報告

日本支部の2021年度年次大会は、下記の通り開催されました。ご参加いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

[日時] 2021年12月11日（土）13:00より

[場所] オンライン（Zoom）

[大会費] なし

[懇親会] なし

### 年次大会プログラム

\*開場（12:30）

開会の言葉

支部長 小路 邦子

司会： 嶋崎 陽一（龍谷大学）

研究発表

「武勲詩」における妖精モルガーヌ  
—『ロキフェールの戦い』を例に—

渡邊 浩司（中央大学）

シンポジウム

老いは愚かさを克服できるのか？—中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって—

はじめに 渡邊 徳明（日本大学）

1. 『パルチヴァール』における主人公の罪と「愚かさ」 松原 文（立教大学）

2. 宮廷恋愛詩における「若さ」と「老い」 伊藤 亮平（松山大学）

3. 『トリスタン』における二代にわたる「若気の至り」？ —イゾルデとの愛をめぐって— 渡邊 徳明（日本大学）

4. 『狐物語』における老い

高名 康文（成城大学）

5. 中高ドイツ語における *tump* 「愚かな」の語義について 嶋崎 啓（東北大）

質疑応答

\*会員研究動向・情報交換フォーラム（16:45～）

\*支部総会（17:00～）

今回も会員のみ参加可といたしましたが、多くの方にご出席いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

（文責：松原 文）

総会議事録

\*報告事項

(1) 2021年度の活動について

コロナウィルスの影響により、今年度もオンラインで大会を開催しました。海外からご参加も含め、多く方にご参加いただきました。

(2) 書誌活動報告

日本支部における業績は、2021年度も充実したものとなりました。毎年夏に業績報告をお願いしていますが、今後も一層のご協力をお願いいたします。また、非会員の業績も掲載可能ですので、積極的に情報をお寄せください。

(3) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について

2021年には複数の記事の作成が進行中で、2022年に掲載される予定です。

(4) 2021年度国際大会について

第26回国際大会はイタリアのカターニア大学で開催予定でしたが、オンラインに変更され2021年7月29日から30日に開催されました。それに先立つ7月19日から25日にオンラインで選挙がおこなわれ、以下の事項が決定されました。現在の国際理事会の任期は当初の2023年から2024年7月までと延期されました。また次回の会議は2024年にマルセイユで開催予定です。（以下追記）書誌データベース（BIAS）のオンライン化が現在課題となっています。

\*審議事項

(1) 2021年度決算報告（2020年12月1日～2021年11月30日）

会計担当幹事の田中ちよ子先生より会計収支決算が作成され、報告されました。

収入

項目	収入額
年会費（88件）	264,000
寄付金（0件）	0
入会金（1件）	3,000
賛助会員費（2件）	10,000
小計1	277,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	0
懇親会費	0
小計2	0
2020年度からの繰越金	1,147,303
普通預金口座利子	10
総計	1,602,313

小計2	0
2019年度からの繰越金	1,121,124
普通預金口座利子	4
総計	1,398,128

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費(未着)	210,735
ホームページ関連費用	7,744
事務用品代・雑費	10,982
通信費(含振込手数料)	21,364
小計	250,825
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	0
懇親会費用	0
小計	0
2021年度への繰越金	1,147,303
総計	1,398,128

(2) 2022年度予算案提出（2021年12月1日～2022年11月30日）

続いて2022年度予算案が提出され、会員の承認を受けました。（学会誌刊行・発送費が例年の2倍となっているのは、支払い手続きが滞っていた2019年度分が合わせて計上されたため。）

収入

項目	収入額
年会費(会員数 75名@3,000円)	240,000
寄付金	0
入会金	0
賛助会員費（2件）	10,000
小計1	25,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	35,000
懇親会費	170,000
小計2	205,000
2020年度からの繰越金	1,147,303
普通預金口座利子	10
総計	1,602,313

## 支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	440,000
ホームページ関連費用	8,000
事務用品代・雑費	15,000
通信費(含振込手数料)	22,000
小計 1	485,000
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	20,000
懇親会費用	170,000
事務用品代・雑費	0
小計 2	190,000
2021 年度への繰越金	927,313
総計	1,602,313

(文責：松原文)

## 2021年度年次大会研究発表要旨

「武勲詩」における妖精モルガーヌー『ロキフェールの戦い』を例に—

渡邊浩司（中央大学）

フランス中世文学の代表的なジャンルの1つに「武勲詩」がある。『ロランの歌』を皮切りに11世紀後半に生まれたこのジャンルは、12世紀中頃にかけて初期の作品群を生み、その後もさまざまな展開を見せた。その結果「武勲詩」には、シャルルマーニュ、ギヨーム・ドランジュ、反逆の諸侯を中心とした3つの作品群が生まれた。

このうち「ギヨーム・ドランジュ詩群」に属する『ロキフェールの戦い』は12世紀末から13世紀初めの成立と推測されるが、この作品の韻文版を伝える10写本の中の5写本には、他の5写本に見られない独自のエピソードが見つかる。それは主人公レヌアールが、妖精モルガーヌの住むアヴァロンへ連れて行かれるエピソードである。

『ロキフェールの戦い』では、レヌアールがサラセン軍によって誘拐された息子マイユフェールの探索に乗り出す経緯が語られるが、「アヴァロン・エピソード」は筋書きの上ではなんら進展を

もたらすわけではない。なぜなら、消息を絶った息子のことを思いながら海辺で眠っていたレヌアールが、モルガーヌを含む3人の妖精によってアヴァロンに運ばれ、そこでの短い滞在を経てもとの海辺に戻ってくる以上、すべてはレヌアールが見た「夢」であるかのように描かれているからである。

「アヴァロン・エピソード」は、12世紀末から13世紀にかけて大きな成功を収めていた「アーサー王物語」の特徴的な要素を持ちこむことで、「武勲詩」の革新を行うために付加されたと考えられる。『ロキフェールの戦い』はおそらく「主人公の異界への旅」というモチーフを利用した最初の武勲詩であり、異界アヴァロンの住人の中では妖精モルガーヌが異彩を放っている。モルガーヌはその美貌で勇士レヌアールを虜にし、一夜の情事で息子を宿すだけでなく、やがて生まれてくる息子の将来を案じるあまり、レヌアールとマイユフェール親子の再会を阻止しようとする。このように『ロキフェールの戦い』では、恐るべき妖女としての側面と極端な母性愛という複雑な両義性が、独創的なモルガーヌ像を作り上げているのである。

### シンポジウム

老いは愚かさを克服できるのか？—中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって—

ドイツ中世宫廷文学の最盛期は1200年頃とされ、その時期の「偉大な」詩人たちによる叙事詩や叙情詩は、中世後期にいたるまで規範とされ、更にはパロディの対象とされ、貴族のみならず社会各層の文化の土台となつた。

ドイツの宫廷文学は当初、人のあるべき姿を表現しモラルを提示しようとした。それまでキリスト教の聖人を人々が模範としていたとすれば、宫廷の騎士や貴婦人が人々の行動規範を体現する存在になったことは革命的変化と言える。その変化は肉体とそこに発する恋愛をテーマ化している点で、いわゆる「12世紀ルネサンス」の一環とも捉

えられうる。

ただし、中世キリスト教文化において、肉体と男女間の愛はあくまで罪深く、常に留保つきで許容されたのも事実である。つまりそれらはあくまで祈りと理知的節度で制御されるべきものであった。ここで一つの問い合わせを我々は提示した。すなわち「人は老いることで賢くなり、無知や肉と情欲の害から離れることができるのだろうか」という問い合わせである。

松原は主人公の罪の償いと成長との関係を扱う『パルチヴァール』について論じた。

伊藤は愛（ミンネ）の概念論争が最も端的に表現された恋愛詩における老いのモチーフについて論じた。

渡邊は成長（老化）と罪深き愛の克服が単純に結びつかない例を『トリスタン』に見いだそうとした。

更にこのテーマについて、ドイツ語圏に特有の傾向が看取できるのか、という点について、ドイツ語圏中世宮廷文学の成立に大きな影響を与えたフランスの文学の動向を踏まえるべきで、その観点から高名が『狐物語』について論じた。

また、このテーマの通時的・歴史的な変遷をたどる目的で、嶋崎はキーワードとなるドイツ語“tump”の意味論的・語用論的变化を語学面から解明した。

## 1. 『パルチヴァール』における主人公の罪と「愚かさ」

松原 文（立教大学）

パルチヴァール研究は20世紀半ばの数十年間、主人公の救済への道筋の解釈に集中的に取り組んだ。主人公がなぜ過ちを犯し、それをどう乗り越えて聖杯城に到達するのかを解釈する際、“tump「愚か」”という主人公を繰り返し形容する単語がキーワードとなった。「愚かさ」とはここでは、経験不足に由来する認識・判断力の欠如であり、聖杯王を救うはずの「問い合わせ」を怠る原因であった。ただし、主人公の生い立ちに起因する「愚かさ」は一体どの時点まで続くのかテクストからは判然としない。また物語の後半はほとんどガーヴァーン

の冒険に割り当てられ、「愚かさ」を克服する主人公の努力は明確には読み取れず、救済は唐突である。発表の前半ではRupp（1957）やHaas（1964）を紹介し、テクスト分析と、12世紀の神秘主義思想と突き合わせた様々な考察を経ても統一的な解釈には至らなかったことを確認した。

発表の後半では“tump”的対義語“wîs”に注目した。『パルチヴァール』では「高齢」ではなく「賢い」という意味の用例が多数を占め、形容詞と名詞の用例を合わせると100例を超える。主人公は聖杯城に再到達した段階でも“wîs”とは形容されず、否定の接続法でだけ用いられる。最も多かったのは宮廷女性（12例）、次いで小姓（6例）、そして個別の登場人物としてはアーサー王（4例）が最多であった。騎士で“wîs”と言われるのは唯一ガーヴァーンで3例である。その他何十人と登場する騎士に対しては武芸などに「通じている」という述語的な用法しかない。一方、非宮廷世界出身の醜い女性クンドリーエ（2例）、魔術師クリンショル（3例）がある。残りの多数はプロローグやエクスクルスにおける一般的賢者や神に対しての用例であった。以上から、『パルチヴァール』を主人公の成長物語と捉えるのは根拠に乏しいこと、ヴォルフラムは騎士の業の賞賛には慎重であったこと、そして女性や小姓、異教徒といった本来騎士の脇役となる登場人物に、その個性として「賢さ」が割り当てられたことが確認された。

## 2. 宮廷恋愛詩における「若さ」と「老い」

伊藤亮平

本発表では、1160-1230年代のドイツ宮廷恋愛詩ミンネザングにおける「年齢」のモティーフの流れを、特にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデとナイトハルトを中心に考察した。ミンネザングでは、「老い」は恋愛に似つかわしくないものとして表面的には敬遠される。しかし実際は、変わらない愛を女性に捧げたことへの「誠実さ・不变(staete)」の証として「老い」が表現されている。対照的に女性は、歳を取ることのない存在として描くことで、女性の「不变」が表され

る。つまり、伝統的なミンネザングにおいて「老い」は、男性の報われぬ愛についての嘆きと己の誠実さを示す常套句であった。

しかし1190年代以降、女性の「老い」について言及が見られ、女性は永遠の存在から、肉感的な、現実的存在へと変化を見せる。女性の「老い」は、伝統的ミンネザングにおける女性の不变性が揺らいでいることを示唆し、この点に「高きミンネ」に対する疑念が垣間見られる。その一方、「老い」というテーマの導入はミンネザングの表現法の拡充に寄与している。例えばヴァルターは、いつまでも若い男を求める女性を揶揄し、歌人と同様に女性も歳を取ると述べ、男女の対等性を主張する。またナイトハルトは「年老いた女性」が恋愛にうつつを抜かし、娘がそれを咎めるという、「老年」＝「賢者」、「若者」＝「未熟、無分別」という構図を逆転させることで笑いを生み出す。

またヴァルターとナイトハルトは、自分自身の老いについて言及するリートを残している。その際、「過去礼賛(laudatio temporis acti)」を主題とし、「老い」＝「賢者」のイメージが用いられている。さらにヴァルターは歌人としての人生を振り返り、「40年以上歌い、語った」と述べ、歌人としての己の存在意義を「老い」によって表現する。

以上のように、「誠実さ」を表すためのレトリックに過ぎなかつた「老い」のモティーフが、次第に「高きミンネ」批判やパロディーなど多義的に使用され、やがて歌人自身の「老い」そのものがテーマ化されるに至る様相を本発表では確認した。

### 3. 『トリスタン』における二代にわたる「若気の至り」？—イゾルデとの愛をめぐって—

渡邊徳明

トリスタンの父リヴァリーンは若さに任せて恋に落ち、戦いの中で死んだ。その父の生き方をトリスタンは一見すると繰り返すかのように、宿命的な恋に落ちる。本発表では、「老い」を直接的に扱うには至らなかつたが、その対概念としての「若さ」が主人公の愛にどのような影響を与えた

のか、ということに着目した。

両親の愛は内的に、作品内在的にその後のトリスタンの生に引き継がれていると読むべきだと発表者は主張した。トリスタンの愛の性質を理解する上で、実母ブランシェフルールの存在について考える必要があると考え、彼の誕生と母親の死についての出来事が、彼のその後の成長と愛にどのように関係するかを検討した。

発表者が強調したのは、亡き実母に対する潜在的な想いである。『トリスタン』を愛の物語として読むとき、この主人公に欠けているのは実母からの愛である。育ての親であるルーアルの妻がトリスタンを実子にも増して愛情をこめて育てた様子が述べられてはいる。その一方で、自分の出産に際して実母が死に、自分も死んだことにされていた、という事実に直面したのであり、自分ゆえに死んだ実母の存在あるいは不在がのしかかると推測される。

なるほどトリスタンは、亡き実母への憧憬を口にすることはない。しかし、Tristanという名が悲しみに由来することをルーアルの話の中で聞かされる。「母への思慕」に言及されないのは、むしろ作者の反語的で無言の表現ではないか。「心の苦しみ」Herzloydeの名を持つ母を置き去りに旅に出ながら、母の教えを愚直に守り、やがて、隠者トリフリツェントから、母の死が自分に起因することを聞かされるバルチヴァールとの対比を、やはりここで思い起こすべきではないか、という問題提起を本発表において行った。

愛に起因する生と死の混淆がトリスタンの人生を特徴づけており、そこには教養小説的・成長物語的な老いと成熟の関係は見えてこない。変わることなき「愛」の観念は「若さ」に由来するものではなく、人間の成長による変化を超越している、という立場で論を進めた。

### 4. 『狐物語』における老い

高名 康文（成城大学）

クレティアン・ド・トロワの『エレックとエニード』や『ペルスヴァル』においては、もともと

は未熟な性質を持っていた主人公が成長する様が描かれている。また、宮廷風騎士道物語や武勲詩では、物語が人気を博したら、登場人物の誕生から死に至るまでの、様々な人生の局面における冒険と成長・成熟の様子を描く、新たな作品が作られることになる。

これに対して、本発表においては、修道院文化をバックグラウンドに持つ『狐物語』では、同様に物語がサイクル化したこと、主人公の幼年時代から「死」までが描かれることになったにも関わらず、その本性は生涯変わらないというメッセージがあり、教養小説的要素を持つ騎士道物語や武勲詩のアンチテーゼになっていることを示そうとした。

そもそも、『狐物語』において主人公の「老い」は、ルナールの詐術の手段として登場した。フレの年代測定によると、初期枝篇の最後に成立されたとされる第I枝篇「ルナールの裁判」では、ルナールは喉元の「白髪」を、自分がエルサンと性的な関係を持っていない証拠として挙げる。また、この枝篇では、告解してもすぐに本性にたちかえってしまう主人公が描かれる。このような主人公の像は、中期枝篇の第VI枝篇における僧院での修行のエピソードや、第VIII枝篇の巡礼のエピソードに反復されて、人の本性が変わらないことを言う「ルナールの告解」、「ルナール修道士」、「ルナールの巡礼」という諺を生み出した。「ルナールの死」を謳いながら、鶏を捕らえるための「死に真似」を描いた第XVII枝篇や、創世記のパロディーとして、世の起りから狡く生まれた狐を描く第XXIV枝篇「ルナールの幼年時代」を生んで、『狐物語』のサイクルは完成する。

当初の目論見に反して、本シンポジウムでは、ドイツの騎士道物語においても、愚かさは老いによって克服されないことが示された。宮廷文化と修道院文化に通底する水脈を探るという課題が残された。

## 5. 中高ドイツ語におけるtump 「愚かな」 の語義について

嶋崎啓

中高ドイツ語のtumpは現代ドイツ語のdummと同様「愚かな」を意味し、wîs「賢明な」の対義語として用いられるが、それは古高ドイツ語においても同じであった。しかし、中高ドイツ語では意味の拡張が生じ、tumpが「未熟な」を意味する場合が出てくる。この意味のtumpは、「一人前でない騎士たち」を指して用いられることが多く、「愚かな」という意味に含まれる否定的ニュアンスの度合いが分かりにくいが、『ニーベルンゲンの歌』2250節ではウォルフハルトを形容するのにtumpが用いられているので、そこではtumpに否定的ニュアンスがないことは明らかである。その同じ節ではヒルデブラントを形容するのにwîsが用いられており、ヒルデブラントは他の多くの個所ではalt「年を取った」が付されているので、tump = junc「若い」、wîs = altという関係が成り立つことが見て取れる。wîsが年齢と関係なく用いられるのは、未来を予言する水の女を形容するような場合に限られ、例外的と言ってよい。そして『ニーベルンゲンの歌』32節で「賢明な（年とった）者達（die wîsen）は、かつて自分たちがしてもらつたように、未熟な（若い）者達（den tumben）を手伝つた」とあるように、wîsである者が、かつてはtumpであったことが示唆されている。そこには、tumpである者も経験を積んで教養を積めば、のちにはwîsになる可能性があるという可変的な人間観が表れていると思われる。ただし、そのような否定的ニュアンスを含まないtumpの例は『ニーベルンゲンの歌』以外にはほとんど見られず、tumpは、結局はもとと同じく「愚かな」という否定的な意味しか表さなくなる。その原因は、tumpの否定的ニュアンスを伴わない意味が特殊な意味であり、そもそも一般化していなかったことにあるのかもしれないが、宮廷文化の衰退とともに、教養を積めば賢明になれるという理想が根付かなかったということなのかもしれない。

## II. 電子化について

国際アーサー王学会日本支部では、会員の皆様への連絡手段に、メーリングリスト等の電子媒体

を活用しております。ただし、ご希望の方へは郵送での連絡を続けております。まだご回答いただいている場合、事務局（[office@arthuriana.jp](mailto:office@arthuriana.jp)）までご連絡くださいますようお願いいたします。

### III. 学会メーリングリストについて

現在、学会員用メーリングリストは間接投稿とさせていただいております。投稿を希望する場合、まずは事務局まで文案をお知らせください。役員で確認後、配信いたします。

また、希望の方には日本支部よりメールアドレスを新規発行いたします。この件も事務局までご連絡ください。

### IV. 会計からのお願い

2022年度分（ならびにそれ以前の未納分）の会費の納入をお願い申し上げます。会費は別送の「払取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部  
ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部  
金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）  
店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）  
預金種目：当座  
口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともににお振込みいただくか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。

【お知らせ】2019年度以降、当学会で進めている電子化に伴い、年会費納入もゆうちょ銀行口座への振込みのみとなります。年次大会会場での現金納入はご遠慮いただけますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。また、会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご留意ください。

（会計：田中ちよ子）

### V. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

「アーサー王伝説解説」の項目では新たに三件の解説がアップされました。独文学に「『トリスタン』の愛についての一考察」、「『花咲く谷のダーニエル』（デア・シュトリッカー）」、そして新たなセクションにスペイン文学を設け「スペインにおけるアーサー王の伝統：中世から『ドン・キホーテ』まで」が公開となりました。

学会公式ツイッター（@inter\_arthur\_jp）でも随時情報の発信中。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

[https://twitter.com/inter\\_arthur\\_jp](https://twitter.com/inter_arthur_jp)

（Web委員長：岡本広毅）

### VI. 第36回年次大会について

第36回年次大会は対面とZoomのハイブリッド形式で開催されます。

（詳細は大会資料をご覧ください。）

日時：2022年12月10日（土）13:00 開会（開場  
12:30）

会場：龍谷大学大宮キャンパス東翼302教室  
Zoomも12:30より接続を開始します。

### VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご

提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウムは同年7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

### VIII. 会員名簿に関するお願い

名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。なお会員に配布される名簿に関しては、一部の事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を未掲載にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

### IX. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

#### 英文学（書誌担当：吉久保肇子）

##### <研究（単行本）>

- 赤江 雄一、岩波 敦子『中世ヨーロッパの「伝統」：テクストの生成と運動』（慶應義塾大学出版会）、2022年、246p.
- 池上忠弘、狩野晃一『チョーサー巡礼：古典の遺産と中世の新しい息吹きに導かれて』（悠書館）、2022年、546p.
- 神崎忠昭『新版 ヨーロッパの中世』（慶應義塾大学出版会）、2022年、480p.
- 菊池雄太、小澤実、小野寺利行、柏倉知秀『図説 中世ヨーロッパの商人』（ふくろうの本/世界の歴史）、2022年、128p.
- 清水 廣一郎『中世イタリアの都市と商人』（講談社）、2021年、184p.
- 高宮利行『書物に魅せられた奇人たち 英国愛書家列伝』（勉誠出版）、2021年、256p.
- 高山博、亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体：統治の諸相と比較』（東京大学出版会）、2022年、648p.
- 竹下節子『疫病の精神史——ユダヤ・キリスト教の穢れと救い』（ちくま新書）、2021年、240p.

チョーサー研究会/狩野晃一編『中世英文学の日々に—池上忠弘先生追悼論文集』（英宝社）、2021年、248p.

向井剛『英国初期印刷本研究への誘い 書誌学から文学・社会・歴史研究へ』（勉誠出版）、2021年、250p.

##### <研究（雑誌・研究紀要等）>

- ITO-MORINO, Satoko, "The Heroic Landscape of the Three Welsh Arthurian Tales : Revisited", in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 104-117.

高木眞佐子「アニメ『円卓の騎士物語 燐えろアーサー』と『燃えろアーサー 白馬の王子』」、『杏林大学外国語学部紀要』、第33号、2021年、pp. 83-104.

高木眞佐子「『ジョン・ハーディングの年代記』の諸相」、安形麻里編『書物に描き出された時／時の中の書物：2020年度極東証券寄附講座「文献学の世界」』、慶應義塾大学文学部、2021年、pp. 43-57.

- TAKAGI, Masako, "John Hardyg and his Documents: Possible Link to Antony Bek." Kyorin University Journal, 39, 2022, pp. 89-99.

FUWA, Yuri, "Curtana, "Monjoie" to Clarente? : Notes on the Sword of Mordred in the alliterative Morte Arthur", in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 90-103.

##### <翻訳>

マイケル・アレクサンダー（野谷 啓二訳）『イギリス近代の中世主義』（白水社）、2020年、434p.

チャントリー・ウェストウェル（伊藤 はるみ訳）『大英図書館豪華写本で見るヨーロッパ中世の神話伝説の世界：アーサー王からユニコーン、トリスタンとイゾルデまで』（原書房）、2022年、432p.

ジョン・ガース（沼田 香穂里/伊藤 盞/瀬戸川 順子訳）『J.R.R.トールキンの世界—中つ国の生れた場所』（評論社）、2021年、208p.

ジェフリー・チョーサー (地村 彰之、 笹本 長敬訳)  
『ジェフリー・チョーサー作 善女列伝・短詩集』 (溪水社) 、 2020 年、 276p.

チャールズ・フィリップス (大橋 竜太監修、 井上 廣美訳) 『中世ヨーロッパ城郭・築城歴史百科』 (原書房) 、 2022 年、 333p.

エドワード・ブルック・ヒッチング (高作 自子訳) 『愛書狂の本棚 異能と夢想が生んだ奇書・偽書・稀観書』 (日経ナショナル ジオグラフィック) 、 2021 年、 256p.

クリス・マクナブ (岡本 千晶訳) 『中世ヨーロッパ 攻城戦歴史百科』 (原書房) 、 2022 年、 289p.

アン・ローレンス (斎藤倫子訳) 『五月の鷹』 (サウザンブックス社) 、 2021 年、 286p.

＜その他＞

高木眞佐子 (講演) 「写真で見るイギリス・オックスフォード～大学町の歴史と現在」、 杏林大学公開講演会、 三鷹ネットワーク大学共催、 2021 年 12 月 11 日、 Zoom オンライン。  
<https://www.mitaka-univ.org/kouza/C2154700>

高宮利行 「アーサー王伝説」  
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLrVqJbyXTp81YO40jy19mAkYaOXMF3uTw>  
[Youtube でのアーサー王伝説解説動画 7 本]

新星出版社編集部 『ビジュアル図鑑中世ヨーロッパ NFT デジタル特典付特装版』 (新星出版社) 、 2022 年、 224pp.

『特別付録 『五月の鷹』 ファンブック』 (サウザンブックス社) 、 2021 年、 p.55.

山田南平 「『五月の鷹』 × 『金色のマビノギオノ』」 、 pp.1-14.

山田攻 「明治・大正期の文人はガウェイン卿をどのように描いたか?」 、 pp.15-19.

小路邦子 「『五月の鷹』 に織り込まれた物語」 pp.19-23.

椿佐助／シオン 「『五月の鷹』 辞典」 pp.24-54.

独文・北欧文学 (書誌担当: 伊藤亮平)

＜研究 (雑誌・研究紀要等) ＞

一條麻美子 「『トリストン』 における原典言及: maere/âventiure/istôrje を巡って」、 『超域文化科学紀要』 (東京大学) 、 25 号、 2021 年、 pp. 7-20.

伊藤亮平 「デア・フォン・キューレンベルクのリートに見られる身体美と内面的美德」、 『広島ドイツ文学』 (広島大学) 、 第 34 号、 2022 年、 pp.31-46.

小澤昭夫 「アイルハルト・フォン・オーベルク 『トリストラントとイザルデ』 (1)」 『八戸学院大学紀要』 (八戸学院大学) 、 57 号、 2018 年、 pp. 81-93.

小澤昭夫 「アイルハルト・フォン・オーベルク 『トリストラントとイザルデ』 (2)」 『八戸学院大学紀要』 (八戸学院大学) 、 63 号、 2021 年、 pp. 21-30.

小澤昭夫 「アイルハルト・フォン・オーベルク 『トリストラントとイザルデ』 (3)」 『八戸学院大学紀要』 (八戸学院大学) 、 64 号、 2022 年、 pp. 95-105.

TERADA, Tatsuo, "Kinuginu - dawn songs in the Japanese court society of the Middle Ages: some aspects on reality and fiction" . (「後朝の歌」: 中世宮廷社会における文芸ジャンルの事実と虚構)、 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』 (北海道大学) 139 号、 2021 年、 pp. 145-158.

YOKOYAMA, Yoshihiro, „Zum Verschwinden des 'veralteten' Verbs dagegen bei Hartmann von Aue“, in Auf den Schwingen des Pelikans. Studien und Texte zur deutschen Literatur des Mittelalters. In Verbindung mit der Wissenschaftlichen Bibliothek der Stadt Trier herausgegeben von Ralf Plate, Niels Bohnert, Christian Sonder und Michael Trauth (Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur, Beiheft 40). S. Hirzel Verlag (Stuttgart, Deutschland), 2022, pp. 177-201.

渡邊徳明 「20 世紀前半における中世的世界観の復活: 『中世の秋』 とドイツ語圏の思想の関わりを中心に」、 桜門ドイツ文学会『リュンコイス』 53 号、 2020 年、 pp. 1-16.

WATANABE, Noriaki, Creativity of the mythical world image in medieval German epics —ab out Cordula Kropik's Gemachte Welten (Created worlds, 2018)、 桜門ドイツ文

学会『リュンコイス』 54号、2021、pp.33-49.

＜翻訳＞

岡崎忠弘『ニーベルンゲン哀歌』（鳥影社）、2021年、201p.

北欧文学

＜研究（単行本）＞

林邦彦『フェロー諸島のアーサー王物語: バラッド『ヘリントの息子ヴィヴィント』をめぐって』（文化書房博文社）、2022年、212p.

＜研究（雑誌・紀要論文）＞

林邦彦「捕らわれの身になる求婚者：フェロー語バラッド3作品をめぐって」、『尚美学園大学芸術情報研究』（尚美学園大学）、34号、2021年、pp.1-20.

＜書評＞

渡邊浩司「書評：『北欧・ゲルマン神話シンボル事典』ロバール=ジャック・ティボー著・金光仁三郎訳」、『英語教育』（大修館書店）70卷11号、2022年、p. 89.

仏文学（書誌担当：川口陽子）

＜研究（単行本）＞

小栗栖等『古フランス語入門：11世紀から15世紀まで』（Amazon [Independently published/Kindle]）、2022年、326p.

OGURISU, Hitoshi, Édition électronique du « Roland » d’Oxford, Nagoya : La Geste Francor 2, 2022, 592p.

横山安由美共著、永井敦子他編『フランス文学の楽しみかた：ウェルギリウスからル・クレジオまで』（ミネルヴァ書房）、2021年、258p.

WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, 220p. [フィリップ・ヴァルテール氏（フランス・グルノーブル=アルプ大学名誉教授）の古稀祝いのために企画・編集された論文集。フランス、日本、台湾から21名の研究者が寄稿し、共著論文を含むフランス語論文11編と英語論文6編のほか、ヴァルテール氏の業績目録を収録。アーサー王物語関連の論考は6編あり、それぞれ『ゴーヴアンの幼少年期』、トリスタン伝説、『ペルスフォレ』、頭

韻詩『アーサーの死』、中世ウェールズのアーサー王物語、『ガウェインと緑の騎士』が分析の対象になっている。】

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

岡田真知夫 ブログサイト ISLE D’AVALON

＜<http://mac-okada.cocolog-nifty.com/blog/>＞に掲載した記事。〔 〕内は掲載日。

＜prié-je＞(3) [2022.3.3]

- ベルールの『トリスタン』に5例拾える1音節のprié(<lat. preco>)は、オイル語地域西部・西南部の方言特徴が表れている形だったということ。＜prié-je>(2)で誤って述べていたことを訂正。

＜ランスロ-0> [2022.3.5]

＜『ランスロ』の校訂版> [2022.3.29]

＜『ランスロ』の英訳本> [2022.4.3]

-『ランスロ』（あるいは『湖のランスロ』）の校訂版と現代語訳の簡単な文献紹介。

＜『ランスロ』LancPrM 15a, 13, 2-3の解釈> [2022.5.26]

- ne cuidier veoir l'eure que + subj. という表現についておさらい。

＜『ランスロ』のスペイン語訳> [2022.8.4]

- Carlos Alvarによる現代スペイン語訳。三者が読み誤っているLancPrM 15a, 13, 2-3を正しく解釈していることも紹介。

SCHUNADEL, Nicolas, « La peur dans Le Chevalier Vert et l'élection mythique de Gauvain », in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 145-154.

SETO, Naohiko, « Note complémentaire sur l'emploi du terme 'assassin' en ancien français et ancien occitan », in Toute littérature est littérature comparée : Études de littérature et linguistique offertes à Roy Rosenstein, Amiens, Presses du Centre d'études médiévales de Picardie, 2021, p. 540-548.

瀬戸直彦「ギラウト・リキエルのパストゥレルに流れる「メタ文脈」—第5歌(PC 248, 22)を中心に」、『Études Françaises - 早稲田フラン

- ス語フランス文学論集』, 第 29 卷, 2022, pp. 23-40.
- 高名康文「ファブリオーにおける貨幣」、『西洋中世研究』13、2021 年、pp. 50-63.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 91 回 フィリップ・マーロウは二〇世紀のガラハッドか?」、『ハヤカワミステリマガジン』2021 年 3 月(745)号、2021 年、pp. 244-247.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 92 回 初期騎士道物語のヒーローたち」、『ハヤカワミステリマガジン』2021 年 5 月(746)号、2021 年、pp. 246-249.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 93 回 騎士たちの不誠実なセキュリティホール。」、『ハヤカワミステリマガジン』2021 年 7 月(747)号、2021 年、pp. 246-249.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 94 回 仕事と私、どっちが大事? in 12 世紀」、『ハヤカワミステリマガジン』2021 年 9 月(748)号、2021 年、pp. 246-249.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 95 回 トリスタンはなぜ「ハイスペックで悪質なバカ」なのか」、『ハヤカワミステリマガジン』2021 年 11 月(749)号、2021 年、pp. 240-243.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 96 回 カフカの『城』の主人公は円卓の騎士パーシヴァルか?」、『ハヤカワミステリマガジン』2022 年 1 月(750)号、2022 年、pp. 230-233.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 97 回 神との接続状況はバリ 5? 圈外?」、『ハヤカワミステリマガジン』2022 年 3 月(751)号、2022 年、pp. 242-245.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 98 回 つぎはぎ長編小説『アマディス・デ・ガウラ』」、『ハヤカワミステリマガジン』2022 年 5 月(752)号、2022 年、pp. 242-245.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 99 回 狐 VS. 狼、イソップ寓話から中世へ」、『ハヤカワミステリマガジン』2022 年 7 月(753)号、2022 年、pp. 252-255.
- 千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第 100 回 最初の悪漢は狐だった。」、『ハヤカワミステリマガジン』2022 年 9 月(754)号、2022 年、pp. 256-259.
- [千野帽子は仏文学者、岩松正洋・関西学院大学商学部教授のペンネーム]
- FERLAMPIN-ACHER, Christine, « Perceforest avant les Lumières : notes sur la survie d'un roman néo-arthurien tardif à l'époque du Roi Soleil », in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 71-89.
- BERTHELOT, Anne, « Enfances Gauvain ou Mariage Arthur? », in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 32-40.
- BERTHET, Jean-Charles, « Tristan et Iseut. Sources brittoniques, fragments gallois et français », in : WATANABE, Kôji (dir.), Si est tens a fester (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022, pp. 41-57.
- 武藤奈月「クレチアン・ド・トロワにおける香り」、『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 120 卷、2022 年、pp. 21-34.
- 横山安由美「『薔薇物語』論争初期の争点とは: ジャン・ド・モントルイユ対クリスチーヌ・ド・ピザン」、『立教大学フランス文学』51 号、2022 年、pp. 3-17.
- 渡邊浩司「『伝記物語』の変容(その 4) —『フロリヤンとフロレット』をめぐって」、『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 99 号、2021 年、pp. 399-432.
- 渡邊浩司「『フロリヤンとフロレット』と『ギヨーム・ド・パレルヌ』—13 世紀の「伝記物語」と「冒險物語」—」、『仏語仏文学研究』(中央大学) 54 号、2022 年、pp. 1-31.
- 渡邊浩司「妖精メリュジーヌとケルトの大女神—インド=ヨーロッパ神話の視点から」、『口承文芸研究』(日本口承文芸学会) 45 号、2022 年、pp. 11-23.

渡邊浩司「『ロキフェールの戦い』における妖精  
モルガーヌー「アーサー王物語」の「武勲詩」  
への影響—」、『人文研紀要』（中央大学人文  
科学研究所）102号、2022年、pp.321-350.

＜研究書の翻訳＞

フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美  
子訳）『ユーラシアの女性神話 ユーラシア神  
話試論II』（中央大学出版部）、2021年、  
278p.

＜翻訳＞

フルール・ヴィニュロン（渡邊浩司・渡邊裕美子  
訳）「冬のフランソワ・ヴィヨン」『中央評  
論』（中央大学）73卷4号（通巻第318  
号）、2021年、pp. 56-62.

リシャール・トラクスラー（渡邊浩司訳）「五十  
歩百歩?—『フロリヤンとフロレット』の散文  
化をめぐって」、『仏語仏文学研究』（中央大  
学）54号、2022年、pp. 237-258.

ジャン=シャルル・ベルテ（渡邊浩司・渡邊裕美  
子訳）「『ゴーヴアンの幼少年期』—失われた  
物語の断片群」（第1部③）、『中央評論』  
(中央大学) 73卷3号(通巻第317号)、  
2021年、pp. 185-199.

ジャン=シャルル・ベルテ（渡邊浩司・渡邊裕美  
子訳）「『ゴギュロール』—知られざる騎士道  
物語の断片」、『日本カムリ研究』（日本カム  
リ学会）15号、2021年、pp. 1-11.

WATANABE., Koji, « Le chat-monstre dans  
Meigetsu-ki de Fujiwara no Teika : première  
occurrence du terme nekomata dans la  
littérature japonaise ?», in IRIS, 41, 2021,  
<https://publications-prairial.fr/iris/index.php?id=2275>

[藤原定家『明月記』の猫また記事の仏訳と解  
説。猫また退治はアーサー王による怪猫退治を

想起させる。共訳者・吉野朋美、オリヴィエ・  
ロリヤール。】

＜その他＞

フランス語教育歴史文法派（有田豊・ヴェスィエ  
ール、ジョルジュ・片山幹生・高名康文）「歴  
史で謎解き！フランス語文法」「ことばのコラ  
ム」（三省堂辞書ウェブ編集部）24-33,  
2021.4-8, 2021.10-2022.1, 2022.3（現在も連  
載中）(<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/columncat/言語/歴史で謎解き！フランス語文法>)

中世ラテン文学・イタリア文学・その他

＜研究（単行本）＞

瀬谷 幸男『著名者列伝-初期教父ラテン伝記集』  
(論創社)、2021年、p.216.

＜翻訳＞

未詳（瀬谷 幸男訳）『カンブリア王メリアドクス  
の物語—中世ラテン騎士物語』、(論創社)、  
2019年、124p.

ネンニウス（瀬谷 幸男訳）『ブリトン人の歴史—  
中世ラテン年代記』（論創社）、2019年、  
128p.

ウィリアム・オヴ・レンヌ（瀬谷 幸男訳）『ブリ  
タニア列王の事績-中世ラテン叙事詩』（論創  
社）、2020年、228p.

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

高宮利行「漱石をめぐる江藤淳・大岡昇平の論  
争」、『関西大学東西学術研究所創立70周年  
記念論文集』（関西大学東西学術研究所）、  
2022年、pp.15-36. [夏目漱石の「蘿露行」  
(1905) 材源をめぐる江藤淳の博士論文『漱  
石とアーサー王伝説』(1975) と、それに関  
する大岡昇平の否定的な書評に端を発した論  
争。TT]

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒171-8501

東京都豊島区西池袋3-3 4-1 立教大学文学部 松原文研究室内

Email: [office@arthuriana.jp](mailto:office@arthuriana.jp)

メーリングリスト: [members@ml.arthuriana.jp](mailto:members@ml.arthuriana.jp)

学会ウェブサイト: <http://www.arthuriana.jp/index.php>